

《研究ノート》

マルクス主義理論史研究の課題 (XIV)

——マルクス、修正主義論争、ポリシェヴィズム——

太 田 仁 樹

1. はじめに——1989年の意味

1989年という年は、マルクス主義の歴史のなかで最も大きな節目の一つであった。6月には中国で天安門事件があり、秋にはベルリンの壁が撤去され、年末にはルーマニアのチャウシェスクが「処刑」された。ポーランド、チェコ・スロヴァキア、ハンガリーでも政変があった。2年後のソ連邦の崩壊につながる、体制としてのマルクス主義の解体の年であったと言えよう。

日本のマルクス主義研究の流れのなかでも、この1989年という年は大きな意義を持つ年であった。この年には、丸山敬一著『マルクス主義と民族自決権』(丸山 [1989])、田中良明著『バルヴスと先進国革命』(田中 [1989])、そして太田仁樹著『レーニンの経済学』(太田 [1989])の3冊の著作が出版された。この3冊は、日本のマルクス主義研究の新たなあり方を表現したものであった。マルクス主義を研究する著作の数をみれば、日本は世界的に有数の多さであった。しかしそのほとんどは、マルクスあるいはマルクス主義者の思想をどう発展させるのか、あるいは現代の日本でそれらをどのように活かすのか、という問題意識からおこなわれたもので、歴史的な存在としてのマルクス主義の特質とその問題点を別扱するものではなかった。また批判的な観点からのマルクス主義研究は皆無ではなかったものの、外在的なイデオロギー的裁断に終わっていて、学問的な研究とは言えないものがほとんどであった。

1956年のスターリン批判以後の日本でのマルクス主義研究の多くは、マルクス①→エンゲルス②→レーニン③→スターリンという、ソヴェト・マルクス主義によってつくられた定式を打ち砕くことを目標にしていた。③に楔を打ち込んでスターリンを批判する者は、マルクスからレーニンにいたるマルクス主義を救済しようとした。この試みを補強するものとしてトロツキーの復権が叫ばれることもあった。②に楔を打ち込んでロシア・マルクス主義を批判する者は、マルクスとエンゲルスだけは延命させようとした。ここでは、ローザ・ルクセンブルクやグラムシが利用されることもあった。①に楔を打ち込んで、エンゲルス以後のマルクス主義全体を俗流と批判する者は、救済に値するものはマルクスだけであると主張した。この場合、しばしばエンゲルスはカウツキーと結びつけられた。さらには、マルクスの生涯を初期、中期、後期と分けて、気に入った時期のマルクスだけを継承すべきだと主張する者もいた。これらの論者は、自分の共感するマルクス主義者あるいはマルクスの

一側面だけを取り上げ、賞賛するものであり、マルクスを救済するとみせて、結局は自己の思想を「真のマルクス主義」あるいは「真のマルクス思想」として称揚するという、自己賞賛＝ナルシズムに耽っていただけであった。このような「研究」は、歴史的存在としてのマルクスとマルクス主義を理解することを妨げるものでしかなかった。

このようなナルシスティックな「研究」状況のなかで、マルクスとマルクス主義を学問研究の対象として措定し、内在的かつ緻密な理論的分析によってマルクス主義的思考の特質と限界とを明らかにしてきたのは、星野中の作業（入江・星野 [1973], [1977], 星野 [1982 a], [1982 b]）であった。1989年の3人の著作も、星野が切り開いてきた作業を継承するものであった。そこでは、研究対象と研究主体の一体化が自覚的に退けられ、研究対象の問題性は、マルクスの思想そのものに淵源するものとして明らかにされた。それらはソ連・東欧の解体に先立つ、10～20年の学問的営為の所産であったが、ソ連・東欧の解体後15年の現在に読み直してみてもいささかも古さを感じさせない。これに対して、マルクスその人についての研究は、依然として、論者が自分の姿をマルクスに投影してそれを賞賛するというナルシズムの泥沼を抜けだすことのできない状態が続いている。

マルクス研究とは対照的に、マルクス主義研究は1989年を里程標として、社会思想史学会の「マルクス主義の展開」セッションおよびポスト・マルクス研究会を軸に前進しつつある。本稿は、そこでの研究成果を踏まえて、「マルクス主義思想史の中のレーニン」について再考察しようとするものである。まず、マルクスとエンゲルスの思想をまとめて、マルクス思想として取り上げ、その特徴を明らかにし、次にドイツ語圏のマルクス主義およびロシアのボリシェヴィズムを比較検討する。

2. 「無法・無国家共同体」思想としてのマルクス思想

農民問題と民族問題がマルクス主義のアポリアであり、それはマルクス自身が「プロレタリアート第一主義」であり、「西欧中心主義」であったからである、という指摘がなされることがある。確かに『共産党宣言』などを見ると、そのような指摘が当たっているかのように見える。しかしながら、マルクス主義運動が一応の成功（権力獲得）を成し遂げたのは、西欧ではなく非西欧においてであり、第三世界においてであった。そこは、プロレタリアートではなく、農民が住民の大多数を占める地域であった。マルクス主義が「資本主義の先進国」で成功しなかったのは何故か、という問題こそ問われるべきであり、マルクス主義＝「先進国革命」という思い込みこそ疑われるべきであった。この問題はマルクス主義の核心をなす論理と関わっている。

マルクスの思想は、主観においては「プロレタリアートによる人類の普遍的解放」を目指す思想であった、と特徴づけることが出来るであろう。この定式化はマルクス主義を称するすべての諸潮流が共有するものであり、マルクスの思想においても、その後のマルクス主義思想においても、中核的な命題であると言ってよいであろう。この定式化においては二つの問題点が伏在している。「特権的変革主体としてのプロレタリアート」という考えと、「人類の普遍的解放」という考えである。

まず「人類の普遍的解放」という問題に関わる、マルクスとエンゲルスの将来社会構想について考えてみよう。彼らの目指した「人類の普遍的解放」が実現した社会は極めて抽象的に表現されてい

る。「人間社会の後史」(Marx [1859])とか、「自由人の共同体」(Marx [1867])とか、「普遍的に発展した諸個人が彼らの共同体的、社会的生産性をもまた彼らの社会的力能として、これを共同的に自分たちの下に服属させるということのうえに築かれた自由な個性体」(Marx [1857-58])と言うような将来社会の特徴づけがそれである。それに対して、人間社会の前史は次のように特徴づけられている。「大づかみに言って、アジア的、古代的、封建的および近代市民的生産様式が経済的社会構成のあいつく諸時期として表示されうる。市民的生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的諸関係である。敵対的と言うのは、個人的敵対という意味ではなく、諸個人の社会的生活諸条件から生じてくる敵対と言う意味である。」(Marx [1859])

もっとも問題となるのは、彼らの将来社会構想においては、社会的敵対という意味での諸個人の利害対立は消滅しているということである。「国家の死滅」と言う考えはこのような将来社会構想と照応している。社会的利害対立が無ければ、法も無いし国家という存在もあり得ないことになるからである。彼らの将来社会像のなかには、対立的利害関係の調整の場としての法的諸関係の存立する余地はない。法とか国家とかいう制度は、自由人の共同体には必要がないのである。ホッブズやロックなどの近代政治思想は、対立する利害を持つ諸個人がどのようにして共存しうるのか、共存を可能にする制度的枠組みを如何に設計するのかを追究したものであるが、マルクスやエンゲルスにはそのような問題意識は皆無であった。諸個人の社会的対立そのものが消滅する社会においては、それを調整する制度は必要ないからである。彼らの将来社会構想は、生産力の発展とともに複雑な利害対立を内包せざるをえない人間社会の実際から遊離したユートピアであった。それは低い生産力段階の共同体と高度な生産力の発展とが共存する奇妙な夢の世界だったと言えよう。

彼らの構想した将来社会は利害対立のない社会なのだから、無秩序な混乱した社会ではなく、秩序の保たれた社会ではあるが、法も国家も存在しない社会という意味で「無法・無国家共同体」と呼ぶべき性格の社会であると言えよう。この意味で彼らの思想は「無法・無国家共同体」思想と呼ばれるのが相応しいものであった。

ついでながら、マルクスの将来社会構想は「市民社会の再建」であると主張する一部の見方について考えてみよう。「市民社会」は非常に多義的な用語で、これを使用する者はまず厳密な定義をする必要があるが、そのような仕方で議論をしている者は多くはない。しかし、定義の多様性にも一定の範囲がある。ヨーロッパ史において、またヨーロッパ政治思想史において、市民社会はその内部に利害の対立する諸集団が共存する場を意味している。そのような対立する利害の衝突と調整の場としての市民社会は、国家の存在とその権力行使のチェック・システムとしての法制度の存在を前提としている。この意味でマルクスやエンゲルスの構想する、利害対立の無い「無法・無国家共同体」を「市民社会の再建」であると主張するのは、マルクスやエンゲルスの思想の正確な理解を妨げるものではないと言えよう。「市民社会的マルクス主義」者と類似の主張をしているものに「アソシアシオン論」者と称する人たちがいる。「アソシアシオン論」者のマルクス理解が誤ったものであることは、国分幸の優れたマルクス研究(国分 [1998])がすでに明らかにしているところであるが、「アソシアシオン論」者も「無法・無国家共同体」としてのマルクスの将来社会構想の問題点を看過していると言えよう。

次に「特権的変革主体としてのプロレタリアート」という彼らの考えについて検討してみよう。プロレタリアートの特権的性格については、彼らの綱領的著作『共産党宣言』において端的に述べられている。「今日ブルジョアジーに対立しているすべての階級のうちで、プロレタリアートだけが真に革命的な階級である。その他の階級は、大工業の発展とともに衰え、没落する。プロレタリアートは大工業の特有の産物である。」(Marx und Engels [1848]) ここで「その他の階級」と呼ばれているのは、中間身分(小工業者、小商人、手工業者、農民)やルンペン・プロレタリアートたちである。マルクスやエンゲルスは、彼らの著作の至る所で、これらの人々に対する蔑視をあからさまに表明し、口汚い悪罵を投げかけている。プロレタリアートが歴史の進歩を体現しているのに対し、彼らは歴史の進歩の中で消滅していくべき存在だからというのである。マルクスやエンゲルスは自分たちをプロレタリアートの先進部分だと自称していた。このような自己規定は、歴史において特権的な位置にあるプロレタリアートと自らを一体化することによって、左翼党派政治のなかで、自分たちが特権的な位置を占めることを正当化しようとする論理であったと言えよう。このことは、他の左翼諸党派を「その他の階級」に落とし込める彼らの論争作法を見れば明らかである。

市民的生産様式が敵対的諸関係の最後のものであるという彼らの考えは、その墓堀人であるプロレタリアートの特権的地位を歴史的な意味で強化する論理となっている。歴史上の諸時期における階級闘争において、奴隷や農民は、それぞれの時期に革命的な役割を、すなわち人類の歴史において進歩的な役割を果たしていた。しかし、プロレタリアートは人類の前史を終わらせる主体であるのだから、その人類史における役割は奴隷や農民とは較べられないほどの意義を持つものとなる。プロレタリアートの人類史における特権的な地位の強調は、マルクスとエンゲルス自身の歴史的な地位の特権性の主張でもあった。

「無法・無国家共同体」という将来社会構想においては、対立する利害の調整とか、利害団体間の妥協というものは存在しないことになるが、利害の異なる集団との調整や妥協は、権力獲得以前においても最小限にとどめられるべきものであった。マルクスやエンゲルスがいわゆる「労農同盟」の必要性を説いたことは確かであるが、農民のような中間身分が「革命的になることがあるとすれば、それは彼らがプロレタリアートのなかに落ち込む時がせまっていることをさとした場合であり、彼らの現在の利益ではなしに、未来の利益をまもる場合であり、彼ら自身の立場を捨てて、プロレタリアートの立場にたつ場合である」(Marx und Engels [1848]) という『共産党宣言』の論理の前では、同盟のための有効な政策を打ち出すことは到底出来るものではなかった。同様のことは民族問題についても言えよう。アイルランド解放闘争やロシアの反専制運動を評価する場合にも、「先進国プロレタリアート」の立場から問題が考察されているために、それらの運動は「先進国プロレタリアート」の利益になる場合に評価されるにすぎなかった。彼らの革命戦略が「プロレタリアート第一主義」とか「西欧中心主義」とかいわれる所以である。

利害の調整とか妥協を拒否する姿勢は、諸階級の利害の調整と妥協の場である近代国家における法制度と国家機構の全面的否認に通じていた。「パリ・コミューン」を傍から見ていたマルクスは、『フランスにおける内乱』において、「労働者階級は、既存の国家機構をそのまま掌握して、自分自身のために行使することはできない」(Marx [1971]) と高らかに宣言した。マルクスとエンゲルスに

としては、プロレタリアートはブルジョア国家の政治圏の外側に存在するものであった。経済的には資本主義的生産力の担い手となっているにもかかわらず、政治的・法的なアリーナから排除された存在、それがプロレタリアートだということである。経済的には主人公であるにもかかわらず、政治的・法的にはプロレタリアートが無力な存在であること、ここにブルジョアジーの支配の転覆とプロレタリアートの権力獲得の歴史的必然性の根拠があると言う訳である。当然、既存の法秩序の外部にいるプロレタリアートによる武力革命という戦略が構想され、議会での多数を獲得することによる権力獲得が考えられる場合も、法制度を尊重するという観点からではなく、彼我の力関係という観点から考慮されるにすぎなかった。

プロレタリアートが既存の政治圏の外部に存在しているという認識は、支配者たちとプロレタリアートをともに包含する共同体の不在という認識、すなわちプロレタリアートは国民国家という共同体の外部に存在しているという認識につながっている。『共産党宣言』において、彼らは次のように述べている。「共産主義者は、祖国を、国民性を、廃止しようとしていると非難されている。／労働者は祖国を持たない。持っていないものを取り上げることはできない。プロレタリアートは、まずもって政治的支配を獲得して、国民的な階級の地位にのぼり、みずからを国民にしなければならないという点で、ブルジョアジーの意味とはまったく違うが、それ自身やはり国民的である。」

(Marx & Engels [1848]) この部分は、マルクスやエンゲルスのインターナショナリズムがコスモポリタニズムとは違うということを主張するためによく引用される部分であるが、問題なのは、既存国家のなかではプロレタリアートは国民ではなく、「政治的支配」を、すなわち権力を獲得してはじめて「国民」になることができる、と彼らが認識していることである。「近代的統治」の特徴である、被支配者の多数を「国民」として統合し、「国民共同体」の成員としての意識を植えつけることによって支配をおこなうという事態を、彼らは認識できなかった。

マルクスとエンゲルスは自らの政治的立場を「プロレタリアート」の立場と称していたが、確立した資本主義社会に現実に存在する労働者たちは、彼らが期待していたような「革命的なプロレタリアート」ではなかった。19世紀後半のイギリスの労働者階級の主力は、政治的に革命的なものではなく、ブルジョア政党を通じた改良を目指していた。マルクスとエンゲルスは、このようなイギリスの労働者たちを「不甲斐ない」と叱責したが、現実の労働者の意識がそのようなものであることの理由を理論的に説明することができず、「労働貴族」論などによって、イギリス例外論を展開した。すなわち、イギリスの労働者は労働者本来の革命性を喪失している、あるいは本来の姿から歪められている。それは「労働貴族」が歪めているからである、と彼らは主張したのである。しかし歪んでいたのは、イギリスの労働者ではなく、マルクスとエンゲルスの「近代的統治」についての認識であった。近代資本主義システムの中心部と半周辺の一部に成立した統治システムは、被支配者が支配者の設定した土俵を受け入れ、被支配者が支配構造を日々再生産することによって成立するもので、政治や法の機構から被支配者を排除することによって維持されているのではなかった。「近代的統治」の確立したもとでの労働者たちは、一時的に革命的になることがあっても、マルクスの「無法・無国家共同体」を目指すことはなかった。マルクスとエンゲルスは、イギリスの統治構造が資本主義システムの中心部における本来の姿を見せつつあるときにそれを見抜くことができなかった。すなわち、「本

来の姿」を「歪められたもの」と見なし、彼らの頭の中で思い浮かべた革命的な「プロレタリアート」というイメージを現実の労働者の「本来の姿」と考えたと言えよう。

現実の労働者たちが革命的ではないという事実は、「革命的なプロレタリアート」の代弁者を自任したマルクスとエンゲルスの革命構想の根幹を揺るがすものであった。変革を目指す政党は現実の労働者たちの中で影響力を保持しようとするならば、革命ではなく改良の政策を提起し、それを実行できる能力を要求されることになるからである。革命的言辞はそのような能力の形成を妨げる役割を果たすのみである。

マルクスの政治活動は、亡命左翼の狭い世界の中でのヘゲモニー争いに終始するものであり、一国の政治のあり方を左右するレベルでの活動ではなかったことに注意すべきである。一国の進路をめぐる大きな政治的なアリーナと無縁のところでは活動していたがゆえに、世界革命などという空疎な革命的言辞を弄し続けることができたとも言えるし、革命戦略の前提となる資本主義社会の政治構造に対する認識を根本的に見直す必要も感じなかったと言えよう。「プロレタリアート」は、経済的には資本主義的生産力の担い手であるにもかかわらず、政治的には国家の進路決定から排除された存在、国民共同体の外部にある存在であり、法とは、「プロレタリアート」に対する抑圧を正当化する、支配者の意思の表現にすぎないものであると考えられた。資本主義の支配構造についてのこのような理解が、「労働者階級は、既存の国家機構をそのまま掌握して、自分自身のために行使することはできない」という主張の背後にあった。「プロレタリアート」は、ブルジョア的國家機構の外部に存在し、既存の國家機構を解体することによって自己の権力を打ち立てる、これが彼らの革命戦略であった。「プロレタリアートの独裁」と呼ばれるこの権力は、その行使において、法によるチェックを受けるべき存在とは考えられていない。「無法・無國家共同体」という将来社会構想は、過渡期の國家に対する法的なチェック・システムの不在と言う戦略構想を導きだした。このような戦略構想が現実化すれば、そこに現れるものが、「無法・無國家共同体」ではなく、「法治國家」と対立する意味での「人治國家」であろうことは予測されることであった。

マルクスとエンゲルスの「無法・無國家共同体」というユートピアは資本主義的國民共同体の内部に包摂された現実の労働者たちの中に共鳴盤を見いだすことはできなかった。また國民共同体の内部での改良をめざす労働者たちの志向は「歪められたもの」とであるとする彼らの認識は、労働者の運動に対する彼らの影響力を微々たるものにとどめるという結果を招いた。彼らの過渡期國家構想は実現可能性のないものであり、その問題点が現実の歴史の中で検証されることもなかった。そのままでは「人治國家」の出現も無かったのである。マルクス主義が最初に影響力を獲得したドイツ語圏と最初に権力を獲得したロシアの歴史を検討するなかで、「過渡期國家」構想がいかにして現実のものとなりえたのかを明らかにすることができる。

3. ドイツ語圏マルクス主義——「市民的マルクス主義」の挫折

ドイツ語圏（ドイツおよびオーストリア）における國民統合は、19世紀後半には、相当な進展を見せていた。参政権の拡大、社会政策の実施、教育体制の整備、兵役義務の拡大により、労働者階級の

国民共同体への帰属意識は高まっていた。1914年に世界大戦が勃発したときに労働者を含めた戦時協力体制が構築されたということはこの事情を表している。既存の政治圏の外部に存在する革命主体が既存の国家機構を破碎して、権力を樹立するという革命構想は、中・西欧においては、すでに現実性を持たないものになっていたと言えよう。だが、ドイツ語圏では、労働者階級の国民への統合とマルクスの革命的イデオロギーが併存していた。修正主義論争はこの併存状況から生まれたのであるが、「左派偏重」の研究姿勢に立つ研究者たちは、このことの意味を捉えそこなっていた（「左派偏重」の研究姿勢の問題点については、太田 [1991] を参照）。

たしかに、ドイツ語圏では、マルクス主義運動と労働運動は強固に結合して、著しく発展したように見えた。ドイツ帝国では、1890年に社会主義者鎮圧法が廃止され、1891年には改名したドイツ社会民主党（SPD）のエルフルト党大会でマルクス主義的な綱領が採択され、1898年の帝国議会選挙ではSPDは第2党に躍進した。オーストリア帝国でも、1889-90年の年末年始に、ハインフェルト党大会でオーストリア社会民主労働者党（SPÖ）が結成され、やはりマルクス主義的な綱領が採択された。1897年にはSPÖはオーストリアの帝国議会においても2桁の議席を獲得し、国政の場に公然と登場した。ドイツのマルクス主義運動の組織的指導の中心人物はアウグスト・ベーベルであり、オーストリアの中心的指導者はヴィクトル・アドラーであった。マルクス亡き後のエンゲルスは、彼らと密接な連絡をとり、マルクス主義をヨーロッパ大陸に定着させようとした。エンゲルスの指導を受けつつ、マルクス主義の革命理論を新しい状況に適應させようとしたのがカール・カウツキーだった。カウツキーはベーベルおよびアドラーと協力して、SPDの「エルフルト綱領」とSPÖの「ハインフェルト綱領」の二つの綱領を起草した。彼こそは、この時期の代表的マルクス主義理論家であったと言えよう。

カウツキーの課題は、既存の政治圏の外部に存在するプロレタリアートが、外部から国家機構を解体して、「プロレタリアートの独裁」を樹立するという、マルクスの革命的戦略と、帝国議会に議席を持つ社会民主党が個々の国政上の問題に対して具体的な態度を明らかにするという現実的活動とを架橋することであった。現実政治の場では、支配者による「上からの国民統合」の動きに対応した改良要求を実現させていくことにより、労働者たちは自らの組織を伸張させてきた。マルクスとエンゲルスの「プロレタリアートは、政治的支配を獲得して、国民的な階級の地位にのぼり、みずからを国民にしなければならない」という主張にもかかわらず、労働者たちは既存の国家を前提としつつ、権力獲得以前から「国民」として、権利の獲得と福利の改善を目的とした活動を展開していた。労働運動は、マルクスとエンゲルスが罵倒した、既存国家を前提としたフェルディナント・ラサールの路線で前進していたと言えよう。既存の国家権力の外部からの破碎ではなく、議会とか労働組合を通じた、既存の国家機構の土俵の中での改良を、マルクスの革命構想の中で位置づけるという、解答不可能な難問を解決することがカウツキーの課題であった。

カウツキーは、ドイツの労働者たちが国民共同体に包摂されていることを前提に議論を展開した。同時に、マルクスとエンゲルスの革命的プロレタリアート像を維持しようとした。国家市民（公民）としての労働者と革命的主体としての労働者を統一しようとしたという意味で、カウツキーを「市民的マルクス主義」と呼ぶことが可能であろう。しかし、この両側面を実践において結合しようとする

ことは不可能なことであった。

この無理を鋭く突いたのがエドアルト・ベルンシュタインであった。ベルンシュタインはドイツの現実の中でマルクス的な「革命的プロレタリアート」幻想を維持することが、認識の問題として誤りであるばかりでなく、実践的に有効な戦略を阻害する政治的な誤りであることを見抜いた。彼の問題提起は、亡命左翼の中の狭い党派政治の中でのみ通用する革命的言辭からの訣別の必要を示すものであった。

ドイツ・マルクス主義といわれる知識人たちは、マルクス的な革命的言辭を払拭することができなかった。レギーンやアウアーなど、労働組合の指導者たちは、マルクス的な「革命的プロレタリアート」幻想とは無縁に、日常的改良闘争に邁進したが (Steinberg [1979]), 左翼知識人たちは社会主義者鎮圧法時代の、社会から疎外された状況の中で涵養された、既存の政治圏の外部からの革命という発想に固執した。左翼的空論を無視し、日常実践的課題に徹することで、革命的言辭との衝突を回避したレギーンやアウアーに較べて、ベルンシュタインの言動は、現実主義によって革命的言辭そのものを解体させる危険なものと感じられた。このような事情が、マルクス主義的知識人たちの反ベルンシュタイン感情を刺激したと考えられる。

ローザ・ルクセンブルクやバルヴスなどその当時のドイツ・マルクス主義圏に寄生した東欧出身の急進主義者たちは、「オスト・ロイテ (東方の人々)」と呼ばれる。彼らの「プロレタリアート」像は、極めて観念的でドイツの現実の労働者たちとは接点を持たないものであった。もっぱら文筆の徒であり、出身国でも、ドイツでも、地道な労働運動の組織活動に携わっていなかったオスト・ロイテにとっては、『共産党宣言』で描かれたブルジョアの政治圏から排除された「プロレタリアート」という像は、故郷からも、ドイツ社会からも、政治的・社会的に切り離された存在であった自分の境遇に重ねあわせることのできるものであった。彼らにとって、支配者と被支配者とはまったく別個の世界を形成しており、被支配者が同意のもとで支配を受けるなどということは考えられなかった。19世紀末のドイツは不十分ながらも「近代的統治」が確立しつつあったが、オスト・ロイテは、マルクス的な「革命的プロレタリアート」像を維持した。カウツキー自身、マルクス的な「革命的プロレタリアート」像を十分に払拭できていなかったため、オスト・ロイテをベルンシュタインに差し向けるという対応をとることになった。「市民的マルクス主義」と「原理主義的マルクス主義」の奇妙な共同戦線は、1910年頃まで維持され、やがて解消された。

ベルンシュタインの問題提起は、「近代的統治」の下での変革戦略の問題として受けとめられるのではなく、資本主義経済の発展が『資本論』の妥当性を失わせるのか否かという問題に矮小化されて受けとめられた。したがって、資本主義の発展段階論の形成によって反論可能なものであると理解された。ヒルファーディングの『金融資本論』が、このような意味でのベルンシュタイン批判の代表であり、レーニンの『帝国主義論』はこれを継承するものであった。後代の研究者もヒルファーディングやレーニンの論理を受け入れたため、ベルンシュタインの問題提起と「修正主義論争」の意味を正しく理解することができなかった。

ワイマール期のSPDは政権党にもなり、改良的政策を追求したが、マルクス的な「革命的プロレタリアート」像の払拭は不十分であった。ワイマール期ドイツの外的環境は、安定した「近代的統

治」を許さないものであった。この状況がドイツ共産党 (KPD) とナチスという、外部から既存の国家を解体しようとする運動の発展条件となり、国家と市民社会に定位したブルジョア諸政党と SPD はこの運動に圧倒されていくことになったと言えよう。

オーストリアでも事情は同様であった。ハプスブルク帝国は、多様な諸民族を国民統合することに成功しなかった。1918年の敗戦とともに、チェコ人、スロヴァキア人、ポーランド人、ウクライナ人、ルーマニア人、ハンガリー人、クロアチア人、スロヴェニア人、イタリア人が離脱し、多民族帝国は解体した。残されたドイツ系の共和制オーストリアにおいては、SPÖの共和国防衛同盟と右派の護国団という二つの武装団体の存在により、国家の中に深い亀裂が入り、「近代的統治」は安定したものとならなかった。こうした状況に規定されて、オーストリアの社会民主主義の中には、マルクス的な「革命的プロレタリアート」幻想が、SPDにおける以上に残存し続けた。1926年に採択されたSPÖの「リンツ綱領」における改良主義と革命主義の奇妙な共存はその例と言えよう。

SPDはナチスに、SPÖはオーストリア・ファシズムに敗北し、党幹部は亡命を余儀なくされた。両党の理論的な指導者であったヒルファーディングとパウアーは、亡命先のフランスで、それぞれ1941年と1938年に客死した。すでに高齢であったカウツキーも1938年にオランダで死んだ。この時期の彼らの死は、「ポリシェヴィキ」とは区別されたドイツ語圏マルクス主義の終焉を感じさせるものであった。第2次大戦後のドイツやオーストリアの社会民主党の再出発は、マルクス的な「革命的プロレタリアート」幻想とも「無法・無国家共同体」思想とも訣別したところから始まることになる。

4. ポリシェヴィズム——「無法・無国家共同体」思想の復権

オスト・ロイテの故郷よりもさらに東方のロシアの地において、マルクス主義は初めて国家権力の獲得に成功した。なぜマルクス主義は「先進資本主義国」ではなく、「後進国」のロシアで成功をおさめたのか？

ロシアでは、資本主義の発展はより遅れたものであり、工場労働者の比率も低かったのだから、プロレタリア革命の思想であるマルクス主義の広がる基盤は小さいと考えられるかもしれないが、マルクスの思想はロシアの知識人のなかでは、西欧諸国の知識人層の間でよりも早くから知られていた。『資本論』初版は、ドイツ語版のわずか5年後の1872年に、外国語としては初めてロシアで出版されている。

ロシア帝国は、中世封建制度から成長してきた西欧や中欧の諸国とは異質な経路を通過して発展してきた。ロシアにおいては、国民共同体は成立せず、驚くほど多数の民族が異民族支配の下で呻吟し、農民は共同体の中に閉じ込められ人格的隷属を強制されていた。ロシアの官僚制は非効率で、有能な人材をリクルートすることができなかったのだから、西欧的知識を身につけた知識人で、体制内での改革の方途を見いだせない者たちのなかから、ナロードニキという政治潮流が現れた。彼らは、専制体制（ツァーリズム）を破砕して、共同体農民に依拠する社会主義によってロシアを再生しようと考えた。『資本論』の翻訳に携わった、ロパーティンやダニエリソンたちもナロードニキの流れのなかにいた人々であった。ナロードニキの反資本主義思想は『資本論』のなかにその理論的後ろ盾を見いだ

したのである。

ナロードニキは、資本主義化しつつあるロシアの現状に反対する闘争に立ち上がったが、資本主義の成熟の結果として成立するプロレタリアートに将来を託するのではなく、農民共同体を将来社会の基礎であると考えた。ナロードニキによれば、資本主義の発展は農民共同体を解体することによって、社会主義の基盤を喪失させてしまう。したがって、できるだけ早くツァリズムを打倒しなければならない、革命の機は熟しているだけでなく、時とともに失われていくのであるから、この機を逃してはいけないのである。

ナロードニキ運動の主流から離れ、スイスに亡命したプレハーノフは、共同体農民にではなく、資本主義発展の産物としてのプロレタリアートにロシアの将来を託すようになる。この意味で彼はロシアで最初の「マルクス主義者」となった。彼の立場は、資本主義に対する闘争ではなく、順調な資本主義の発展の道を開くための専制の打倒、すなわち社会主義とは切り離された民主主義革命を当面の課題とするものであった。このような考えは、「非連続的二段階革命論」と呼ばれている。逆説的なことに、マルクスの「革命的なプロレタリアート」の意義の強調は、現実の労働運動がほとんど存在しないロシアでは、資本主義の進歩性の強調に通じ、資本主義の成熟を待つ「待機主義」という意味を帯びることになり、体制転覆という意味での革命的な性格を薄めさせたのである。

レーニンも、ナロードニキとして出発したが、『「人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか?』（レーニン [1894]）によって、左翼文筆家としてデビューしたときには、「プロレタリアート」の革命性を強調し、ナロードニキに反対するという意味での確信的な「マルクス主義者」であった。初期のレーニンは、農民共同体の反動性と資本主義発展の進歩性を強調する点で、プレハーノフに同調し、ロシア国内のストルーヴェなどの「合法マルクス主義者」と協力していた。しかし、レーニンは、やがて即時の権力獲得を目指すようになるとともに、マルクスの現実の労働者＝「革命的プロレタリアート」という幻想を克服するようになり、プレハーノフとは訣別していくことになる。現実の労働者の意識がマルクスの意味での社会主義的なものではないという認識においては、レーニンは、ドイツの左翼マルクス主義者たちとははっきりと異なっており、むしろベルンシュタインと一致していた。

1902年の著作『なにをなすべきか? われわれの運動の焦眉の諸問題』（レーニン [1902]）において、レーニンは、労働者の日常意識は社会主義的なものではなく、労働者の日常闘争の延長線上には社会主義はない、と明確に主張している。このレーニンの主張は、カウツキーの『ノイエ・ツァイト』論文からの引用によって権威づけられていた。しかし、カウツキーの議論が、社会主義思想は労働者階級の利害を表現したものであるが、歴史的には知識人のなかに生まれたものであるという歴史的事実を述べたものであるのに対し、レーニンの議論は、現実の労働者という存在からはマルクスの社会主義という目標は出てこないということを強調している点で、カウツキーを批判する内容になっている。レーニンの主張は、「自由人の共同体」という理想を、現実の労働者＝「革命的プロレタリアート」という幻想によって、実在する世界とつなごうとしたマルクス自身に対する批判を含蓄するものであり、ベルンシュタインの現実認識に重なるものであった。

また、ここでレーニンが念頭に置いている労働者とは西欧の労働者であって、ロシアにおける労働

者階級が未成熟であるがゆえに、社会主義意識の「外部注入」や知識人の指導する中央集権党が必要だという主張がなされているのではないことに注意すべきである。確立した資本主義社会の労働者は、マルクスが夢想したような革命性とは無縁であるということを、レーニンはベルンシュタインとともに見抜いていた。現実の労働者＝「革命的プロレタリアート」という幻想のなかに浸っていたオスト・ロイテや、マルクスの幻想と現実の労働者の乖離をなんとか「理論的に」説明しようと苦勞したカウツキーとは違って、彼らは、現実の労働者を直視していたのである。

現実の労働者はマルクスの革命的な革命性を持たないことを承認した点で、ベルンシュタインとレーニンは一致している。ベルンシュタインは幻想的な目標にこだわることを止め、現実の活動を重視すべきであることを説いた。1910年以降のカウツキーも、実践的にはベルンシュタインに追随したと言える。レーニンは、「革命的なプロレタリアート」を現実の労働者と切り離すとともに、「革命的プロレタリアート」を革命的な知識人の党によって作り出そうとしたと言えよう。革命党こそが「革命的プロレタリアート」なのであり、現実の労働者は革命党によって指導される場合にのみ「革命的なプロレタリアート」となりうるのである。現実の労働者は革命党による革命意識の注入がなければ、小ブルジョア的なものにとどまるのであり、革命党による革命意識の浸透によって労働者階級が革命的なものになるのであれば、革命党は資本主義の発達とその結果としての現実の労働者階級の成熟を待つ必要はない。労働者階級の「成熟」とは社会主義意識の吸収によってのみ達成されるものであり、重要なのは、現実の労働者が支配秩序の内部に取り込まれていないことなのである。この点では、西欧の労働者よりもロシアの労働者が、革命党にとって都合のよい状況にあったのである。

ロシアでは、支配秩序に取り込まれていないという点では、農民や被抑圧民族も労働者と同様であった。このことはロシア帝国が近代的な国民統合に成功していなかったことを示すものであり、この点でも、革命運動にとってはロシアの状況は好都合であった。必要なのは、労働運動、農民運動、民族運動に対する革命党の慎重にして大胆な働きかけ（＝動員・操作）であった。

日露戦争と1905年革命は、ロシア帝国の国民統合の弱さを露呈させた。レーニンは『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』（Ленин [1905]）において、当面する革命の課題は自己（革命党）の権力獲得（＝「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」の樹立）であると宣言した。プレハーノフ的な「非連続的二段階革命論」は完全に払拭された。それは、「革命的プロレタリアート」とは革命党に結集する者たちであるという『なにをなすべきか』で示された「プロレタリアート」観と照応したものであった。1917年の「四月テーゼ」路線はここに確立されたと言ってよい。

「二月革命」によるツァーリズムの打倒は、労働者・農民・被抑圧民族・兵士の革命であったが、「十月革命」とその後の内戦は、ボリシェヴィキに「指導」（＝動員・操作）された兵士および労働者の政権の下へ農民運動と民族運動を屈服させる過程であった。レーニンにおいては、農民も被抑圧民族も、労働者と同様に、革命党の動員対象・操作対象として慎重に配慮されるべきであった。しかし、レーニンは労働運動を動員する戦術は持っていたが、農民運動や民族運動を動員する戦術を持ち合わせていなかった。マルクスの「プロレタリアート第一主義」は、ボリシェヴィキ政権にとってもマイナスの働きをしたと言える。

ポリシェヴィキ政権の目標は「無法・無国家共同体」の実現であった。市場と私有財産の廃絶そして搾取者の一掃というマルクスのユートピアは、内戦期という、政権の存立がもっとも危うい時のスローガンとして用いられ、「戦時共産主義」の下での農民からの収奪を正当化する口実となった。「ネップ」期の農民への譲歩も戦術的なものにすぎず、目標とすべき社会における農民の位置についての理論的な見直しを伴うものではなかった。ネップのなかに「市場社会主義」の可能性を見いだす研究があるが（たとえば、岡田 [1999]）、錯覚にすぎない。「無法・無国家共同体」を目指した過渡期の国家は、権力者に対する法的チェック・システムの無い「人治国家」となり、マルクスとエンゲルスのユートピアは実現された。それは彼らが主観的に夢想した状態とは相当に異なった情景の社会であったが、「無法・無国家共同体」思想がもたらす論理的に必然の帰結であった。

5. む す び

マルクス主義は、プロレタリアートに特権的な地位を与え、自らをその思想的表現者であると称した。プロレタリアートは資本主義の発展の産物であるのだから、マルクス主義は「先進国革命の思想」であると見なされてきたし、そう思ってきたマルクス主義者も沢山いる。しかし、「近代的統治」が定着した資本主義世界システムの中心部でマルクス主義が大きな政治勢力になったのは、歴史的に見ればごく一時期のことであった。マルクス主義＝「先進国革命の思想」という思い込みを持っていると、人類史におけるマルクス主義の意味を見失うことになる。

マルクスとエンゲルスの目指した将来社会は、アナキズムの理想とも共通する、対立する社会的利害のない「無法・無国家共同体」であった。それは、経済システムとしては高度に発達した機械制大工業を前提としているにもかかわらず、必然的に随伴する複雑に利害対立する社会を想定しないという、奇妙な将来社会像であった。生産力と社会的分業が高度に発達した、複雑な利害対立に悩まざるをえない工業化以後の人間社会においては、マルクス的な将来社会は実現不可能なものであった。それは、工業化のもたらす物的依存の人間関係を忌避し、また、私的利害によって互に対立し合う人間の共存の場である近代市民社会とは異質な社会を希求するものであった。共同体的な人格的依存の人間関係に対する憧憬と共同体的な社会関係を不可能にする高度工業社会への展望とを併せ持つ奇怪な複合体とも言えよう。当然、このような「無法・無国家共同体」思想は、利害の対立する人間が相互にどのように共存しあえるのかを探求した、ホップズやロック以後の近代政治思想の主流とはまったく異質な思想であった。

マルクス的なユートピア構想は、確立した近代資本主義社会の中心部には、共鳴盤を見いだすことはできなかった。マルクスが特権的な革命主体である「プロレタリアート」と見なした工場労働者は、近代資本主義国家の中に国民として統合されていった。「近代的統治」は、法による国家権力のチェック機能（法治システム）を備え、被支配者が合意によって支配を受け入れるという特徴を持つものであり、労働者たちも、既存の国家体制を前提として、その中での権利の拡大を目指していた。マルクスはこのような、「欺瞞的」な統治システムを理解しなかった。労働者たちは国民共同体から排除されている存在であり、政権の奪取によって初めて「国民」となることのできる存在だと考えら

れたのである。プロレタリアートは既存の国家機構の外部に存在しているという認識から、「労働者階級は、既存の国家機構をそのまま掌握して、自分自身のために行使することはできない」(Marx [1871]) という命題が導きだされた。

マルクスが期待したイギリスの現実の労働者たちは、「本来の革命性」を発揮することはなかった。近代社会の政治圏の外部に存在する革命主体が、既存の国家機構を粉砕し、「無法・無国家共同体」を目指す権力(=「プロレタリアート独裁」)を樹立するというマルクスの革命構想は、亡命知識人の頭の中では存在することができても、現実の政治圏での力とはなりえないものであった。

19世紀の末になって、マルクス主義はドイツ語圏で相当な勢力になったように思われた。しかし、ドイツ語圏のマルクス主義知識人たちは、既存の国家体制を前提にした労働者たちの改良運動に寄生して勢力を伸ばし、革命的な議論を弄んだに過ぎなかった。この事態に無自覚であったのが急進左派であり、この事態を異常と考えたのがバルンシュタインであり、その中間で革命的言辞と労働運動の現実とを架橋しようとしたのがカウツキーであったと言えよう。

ロシア帝国は国民共同体の形成に成功しなかった。労働者、農民、被抑圧民族は、ツァーリズムの暴力装置が麻痺するとただちに既存の国家体制から離脱しようとした。商品経済によって共同体的紐帯が解体されきるところまでいっていなかったロシアでは、マルクス主義やアナキズムの「無法・無国家共同体」思想に対する共鳴盤が存在していた。反体制諸思想が無政府状態のなかで覇を競い、内戦を勝ち抜いたのは、中央集権党としてどの党派よりも強固な組織的団結を持ちえたボリシェヴィキであった。ボリシェヴィキは、現実の労働者の意識から独立することにより、現実の労働者=「革命的プロレタリアート」という幻想から離脱することができ、それによって初めて現実の労働者に能動的に働きかけ、彼らを動員・操作することに成功した。

ボリシェヴィキの権力は、近代的統治のような法によるチェック機能(法治システム)を内在させない権力であり、大江泰一郎が言うように「法治主義」を欠如させたものであったが(大江 [1992])、そのことは「無法・無国家共同体」をめざす権力にとっては当然のことで、現実に現れたシステムは「人治国家」であった。大江の言う「法治主義」の不在は、すでにマルクスの革命構想の基本的特徴であったと言えよう。この点では、マルクスの思想そのものなかに反「法治主義」を見いだしている森下敏男の議論が的を射ている(森下 [1999])。

マルクスの革命構想は、現実の労働者を「革命的プロレタリアート」と誤認する点で実現不可能な欠陥革命思想であった。資本主義世界システムの中心部、すなわち「法治主義」を備えた「近代的統治」の下ではマルクス主義が隆盛となることはめったになかった。「近代的統治」が定着していない社会、「法治主義」が根付いていない社会、「国民共同体」の成立していない社会こそ、マルクス主義の浸透に好適な環境であった。そのような場では、近代的労働者はごく少数なのであるが、「無法・無国家共同体」の構想はかなりの共感を知識人の間で勝ち取ることができたのである。

レーニンの革命的知識人の党は、現実の労働者の意識にとらわれること無く、能動的に活動することができた。レーニンの成功は、マルクス主義が「先進国」に適合的な革命思想であるのではなく、「近代的統治」が未確立で、国民国家の未成立な社会に適合したものであることを示している。レーニンによって、「無法・無国家共同体」を目指す権力は現実態となることができた。成立した国家

は、「法治主義」の欠如した「人治国家」であり、ノーメンクラトゥーラの支配する国家であったが、それはマルクスの夢想とはかけ離れたものであっても、やはり彼の「無法・無国家共同体」思想の可視化された姿であった。マルクスとマルクス主義者を、とくにマルクスとレーニンを切断しようとする研究は、この関係を見抜くことができなかったが、近年のマルクス主義研究はようやくそれを明らかにしつつある。

《参 考 文 献》

- 星野中 [1982 a], エンゲルスと「労農同盟」, 『経済学雑誌』(大市大) 82-6.
- 星野中 [1982 b], 第一インタナショナルと農民問題——続エンゲルスと「労農同盟」(1), (2), 『経済学雑誌』(大市大) 83-1, 2.
- 入江節次郎・星野中編 [1973], 『帝国主義研究 I』, 御茶の水書房.
- 入江節次郎・星野中編 [1977], 『帝国主義研究 II』, 御茶の水書房.
- 国分幸 [1998], 『ディスポティズムとアソシアシオン構想』, 世界書院.
- 久間清俊 [2000], 『近代市民社会と高度資本主義——ドイツ社会思想史研究』, ミネルヴァ書房.
- Ленин [1894], Что такое «друзья народа» и как они воюют против социал-демократов? («人民の友」とはなにか、そして彼らはどのように社会民主主義者とたたかっているか?), В. И. Ленин Полное Собрание Сочинений (П С С), Издание Патое, Институт Марксизма-Ленинизма при ЦК КПСС, Москва, т.1. 『レーニン全集』, レーニン全集刊行委員会訳, 大月書店, 第1巻.
- Ленин [1902], Что делать? Наболевшие вопросы нашего движения (なにをなすべきか? われわれの運動の焦眉の諸問題), П С С, т.6. 訳, 第五巻.
- Ленин [1905], Две тактики социал-демократии в демократической революции (民主主義革命における社会民主党の二つの戦術), П С С, т.11. 訳, 第九巻.
- 丸山敬一 [1989], 『マルクス主義と民族自決権』, 信山社.
- Marx, K. & Engels, F. (1848), Manifesto der kommunistischen Partei (共産党宣言), Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Bd. 4., Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin, (1959).
- Marx, K. (1857-58), Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (経済学批判要綱), Berlin, (1953).
- Marx, K. (1859), Zur Kritik der politischen Ökonomie (経済学批判), Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Bd. 13., Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin, (1962).
- Marx, K. (1867), Das Kapital (資本論), Erster Band. Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Bd. 23. Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin, (1962).
- Marx, K. (1871), Der Bürgerkrieg in Frankreich (フランスの内乱), Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Bd. 17., Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin, (1962).
- 森下敏男 [1999], ロシアの法文化, 皆川修吾編著『移行期のロシア政治——政治改革の理念とその制度化過程』, 溪水社, 第4章.
- 大江泰一郎 [1992], 『ロシア・社会主義・法文化——反立憲的秩序の比較国制史的研究』, 日本評論社.
- 太田仁樹 [1989], 『レーニンの経済学』, 御茶の水書房.
- 太田仁樹 [1992], マルクス主義理論史研究の課題 (IV): 松岡・丸山・田中氏の近著によせて, 『岡山大学経済学会雑誌』第24巻第1号.
- 太田仁樹 [1994], マルクス主義の展開とその歴史的意味, 平井俊彦編著『社会思想史を学ぶ人のために』, 世界思想社, 第7章.
- 岡田和彦 [1997], 『レーニンの市場と計画の理論』, 時潮社
- Steinberg, H.-J. [1979], Sozialismus und deutsche Sozialdemokratie, 5. Aufl., Dietz. 『社会主義とドイツ社会民主党: 第一次世界大戦前のドイツ社会民主党のイデオロギー』時永淑, 堀川哲訳, 御茶の水書房, (1983).
- 田中良明 [1989], 『パルヴスと先進国革命——第二インタナショナル・マルクス主義の到達点』, 粹出版社.